

フローリアン・ザイファート教授による デザイン学科工業デザインコースでの特別演習

山下 明伸・津幡 智

1. はじめに

この度、大阪芸術大学デザイン学科工業デザインコースでは、ドイツのマインツ工科大学教授フローリアン・ザイファート氏を、お招きして特別講座が開催されました。今回の特別講座は、大阪ドイツ文化センターの文化活動の一環としてドイツ人デザイナー、ザイファート教授が、日本に招かれたのが機縁となりました。

ザイファート教授は、マインツ工科大学で工業デザインの教鞭をとるかたわら工業デザイナーとしても、幅広くご活躍中です。日本では、(株)松下電工とのビジネスで以前より何度か来日されています。尚、この度の来日中に日本の大学で教鞭をとる経緯から、大阪芸術大学デザイン学科と金沢美術工芸大学デザイン学科が選ばれました。(注1) 本学デザイン学科では、ザイファート教授の授業をデザイン学科の学生全員が受講できるようにと教授にお願いしましたが講義のみよりも実習を中心にした授業をとる要請から専門の工業デザインコースの学生が受講することに成りました。その講座日程は、本学の事情により一日のみの特別演習となりました。これ迄に、工業デザインコースでは、1967年に第一回の卒業生(現在では500名余り)を送り出してからは、折々に、卒業生の方々による主に企業紹介を兼ねて、この様な特別講演や演習が行なわれて来ました。処が、今回の様な海外からお迎えしては以外な事に、初回(注2)であり好奇心旺盛な学生達を多いに刺激し、また、楽しく学ぶことが出来ました。これは、その折りの工業デザイン教育による現場からの報告です。

2. 授業概要

日時; 1994年(平成6年)5月16日(月曜日)

午前11:00~午後18:10

場所(1); 講演 9号館103教室 II限

授業(1); 講演テーマ「**ドイツの工業製品デザイン**」
※ ドイツの工業製品の歴史的な過程をデザイン面からスライドを上映して解説。

場所(2); 演習 18号館23教室 III、IV、V限

授業(2); 演習課題 I. 形態デザイン演習
「**R(アール)のトポロジー**」

※ 形態の面を構成する直面と曲面との問題の演習。

演習課題 II. 形態デザイン発想
「**イメージ**」

※ 言葉から個性的なデザインを展開して行く為の予備演習。

演習課題 III. 形態デザイン演習
「**SEMANTIK**」

※ 与えられた条件に基づく言葉の意味をイメージして抽象的な形態をデザインする演習。

講師; フローリアン・ザイファート教授

通訳; 関西ドイツ文化センター (大阪)

同センター副館長, 本田 維彦 氏

受講生; 工業デザインコース三回生 (35名)

※受講回生は授業計画によるスケジュールの都合上より選定された。

3. フローリアン・ザイファート教授の略歴

(Prof. Florian Seiffert)

1943年；3月10日 Jamlitz (ヤムリッ) 生

1968年；エッセン工科大学工業デザイン学部卒業
(旧西ドイツ)

1968年～1972年

ブラウン社 (西独) にて工業デザイナーとして勤務。在社中にデザインしたシェーバーやライターがニューヨーク近代美術館において永久コレクション (注3) に選定される。

1972年；ミラノ (伊)、ミュンヘン、ヴィスバーデンにてデザイン事務所設立 (現在はヴィスバーデン) クライアント；Krüps 社、Lowe 社 (ドイツ)

Back&Deccer 社 (アメリカ)

榊松下電工 (日本)

1987年；マインツ工科大学工業デザイン教授

(本田 維彦氏より資料提供)



1-ザイファート教授によるデザイン

(株) 松下電工、阿部 昇氏から資料提供

4. 講演要旨

ドイツの工業製品、特にブラウン社製品を中心にして1950年代から今日に至る迄のドイツデザインの変遷と、それらの製品を工業デザイン的なアプローチから分析しながら解説。

1950年代の人々はモノへの所有欲から工業製品を求めました。それらの製品は、幾何学的な純粋形態が独占的で、製品の機能のみを満たした様なこのシンプルなデザインは製品の機能性や経済性は充たしたけれど、形態は角張った箱型のイメージでした。また、製品の取り扱い方が大変不明瞭に思われたり、使用目的も不明確に思われる様な製品が多かった。例えば、製品の操作部を覆い隠すとその製品が何に使用されるモノなのか、何ら使用者に伝わってこないモノが多かった。

1960年代に成ると人々のデザインに対する欲求が高まって来て、人々は、斬新な製品デザインの流行に影響を受けた。それによって製品デザインに変化が求められて、一つの製品形態が成功すると市場には、その製品の類似品が出回ったりもした。しかし、ドイツ製品の理念は、あくまでも、時代にふさわしい優良品を旨とした製品の質の向上であり、これは非常に広い意味での機能的なデザインでした。(注4)

1970～1980年代では、人間工学のシステムをデザイン面でも、応用研究されてシステムティックな操作性とシステム的な造形とに成った。また、ドイツ民族の伝統的なクラフトマンシップが活かされた誠実で耐久性のある良質な製品と合理性のある単純明快な形態は、洗練された知的なユーザー達に受け入れられた。そのことは、世界中のデザイナー達にも衝撃を与え、その影響は大きかったと言われます。ドイツデザインの理念は、単に、製品の美的面の問題解決のみに止どまらず、生活環境形成の構成要素から捉えられたグローバルな視点からデザインされていた。

現在のドイツデザインでは、市場、心理学、人間工学、エコロジー、民族的な伝統様式などの深い視点を踏まえて技術面や形態面でも、さらに、展開されている。例えば、ドイツ企業を代表するブラウン社のデザイン政策

は、遠大な企業哲学の現実化が目標である。このデザイン哲学がデザイナーの活動への基盤であり指針でもある。それゆえ、ブラウン製品の一貫性あるデザインは、ユーザーと知的に秩序正しく共存している。しかしながら、科学技術の発展と人々の欲望は止どまることなく形態に斬新さと、より人間味のあるデザイン、特に高い感性を求める様に成った。つまり、近年では、デザイナーに特に、知的で個性的な感性 (feeling) が欲求されるように成った。これからのデザインの方向性は、新秩序の構築の為に、新しいデザインテクニック (時代性) の創造が、人とモノを継いで、人々にやさしいデザインに成るであろう。

5. 1 演習課題 I

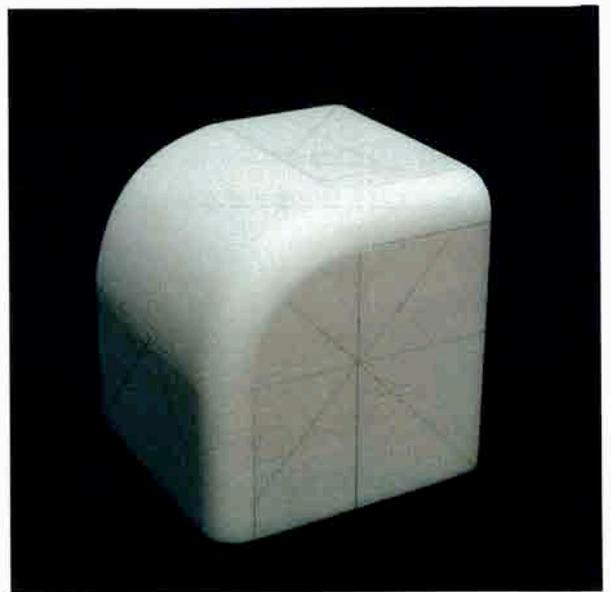
形態デザイン演習「R (アール) のトポロジー」

説明； 形態のコーナーR (Rdius : 半径) の大小は、形態の持つイメージと深く関わって来るので、それぞれのコーナーは、皆同じRの処理にしない方が良い。特に、ある一面を見せ場となるようにしたり、目線が止まるようにしたりする為にはコーナーRに大小の差を付ける等、その為の処理においては、十分に考慮する。この演習では、コーナーRの連続的な変化 (トポロジー : tpology) を美的面からも、如何に、処理して行くかを考察し、体験する。

作業； 立方体の一辺が、150mmの発泡ウレタンブロック (白色) を使用して立方体のコーナーにRを、金属ヤスリなどを使い、削り出して制作する。

- (1)立方体の中心を、正確に捕える。
- (2)一つのコーナーに自由なRを取り、削る。
- (3)先のコーナーに隣り合う、もう一つの他のコーナーにも、Rを取って削る。

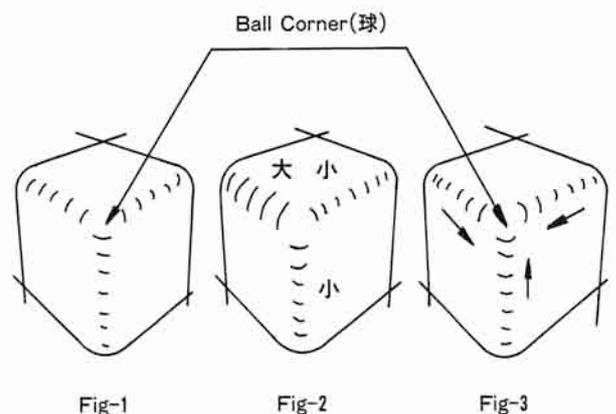
内容； 形態の各コーナーR差を、どの程度にすればデザイン的に良いか。それらと組み合う色々な条件で異なりますが、コーナーRの処理方法によって全体の効果は引き立って見えたり、つまらなく見えたりする。形態をデザインする時には形態の方向性を明確にすることが大切です。



2-R形態に二つのコーナーRがある例

(注) 形態に三つのコーナーRがある場合

- (1)三つのコーナーRは全て、同じRとする。(Fig - 1)
各コーナーは、半球状となり、整った型となる。
- (2)二つのコーナーを同じRとし、大きなRのコーナーを取り巻く (Fig - 2)
- (3)二角大きいRのコーナーで、小さいRのコーナーを取り巻てはならない。



- (4)三つのコーナーとも、異なったRで組み合わせるはならない。
- (5)ただし、このような場合には三つのコーナーとも異なったRでも良い。(Fig - 3)

5. 2 演習課題Ⅱ

形態デザイン発想「イメージ」

文を修飾する言葉の形容詞、例として下記の(1)~(3)の中から各自一つ選択して、その言葉からイメージされる単語を出来るだけ短時間の内に思いつく限り自由連想する。

- 例題 (1)「柔らかい」から雲や豆腐
(2)「固い」から石や針金
(3)「速い」から飛行機や新幹線

「柔らかい」 ⇨ 紙、ティッシュペーパー、布、シルク、綿、小鳥の羽根、フワフワ、ユラユラ、そよ風、風船、やんわり暖か、女の肌、湯煙、赤ちゃんの髪、春の日差し、しんわり包む、はんなり、曲線、……。

内容； 修飾語の形容詞は、物事の性質や状態を描いたり、人間の感情を表わしたりする言葉である。言葉からのイメージには個人的な体験の相違が著しく現れて来ることから形態デザイン発想の導入過程では、特に、イメージの広がりや深さが求められる。

5. 3 演習課題Ⅲ

形態デザイン「SEMANTIK」

下記のテーマ①~⑨の中から各自一つを選び、その言葉の持つ意味を個性豊かにイメージを膨らませて、そのイメージを造型化する。

- テーマ (1)weich (柔らかい)
(2)geschmolzen (溶けた)
(3)aufgebiasen (膨らんでいる)
(4)flüssig (流れるような)
(5)fliegend (垂れているような)
(6)verdreht (ねじれている)
(7)gebogen (曲がっている)

(8)gefaltet (折りたたんだ)

(9)gedruckt (押さえ付けた)

作業； 発泡ウレタン (100×100×200mm、白色)のブロックを使用してテーマのイメージに添って削りながら造型する。

(1) 形態は出来るだけシンプルで象徴的な形態となる方がよい。

(2) 曲面 (三次元の面) は滑らかで流れが不自然にならない。

内容； 形態デザインの発想法の一つとして、発想の具体化である。

SEMANTIK「意味論」 から研究された方法論の展開である。

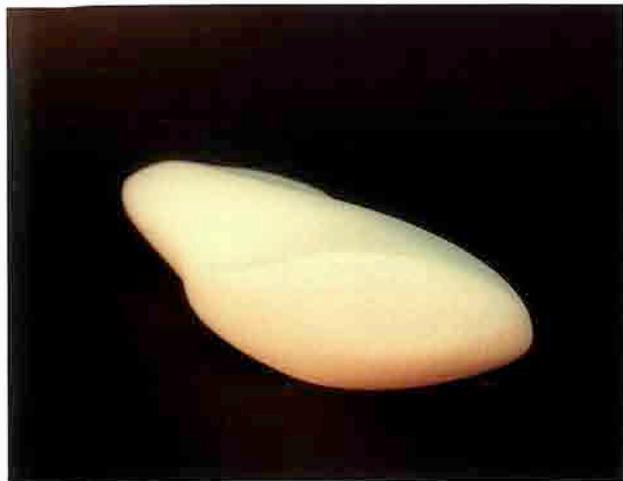
言葉の意味、あるいは、モノの意味は常にある広がりを持っている。その広がり、人の意志で何かを意味づける場合には、その人の体験が作用し、個性化される。つまり、形態に意味を与える事は、個人的な感性が造型化される。

特に立体的なモノは、見る側の視点の位置によって見え方が、大きく異なって見えてるので発泡スチロールのブロックを削りながら造型化する時には、形態がどのような視点からでも与えられたテーマに見える様にまとめる事が大切である。



3 - 授業風景

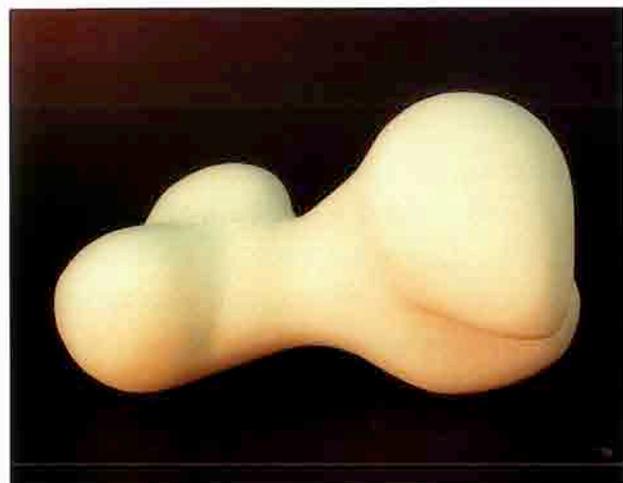
「SEMANTIK」で制作された学生作品



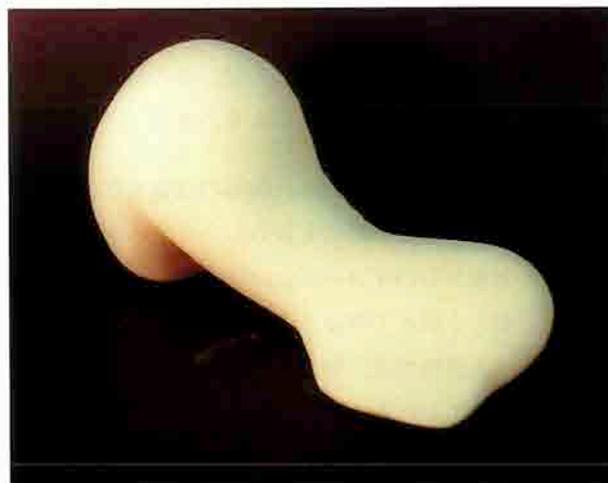
4 - 柔らかい



7 - 鋭い



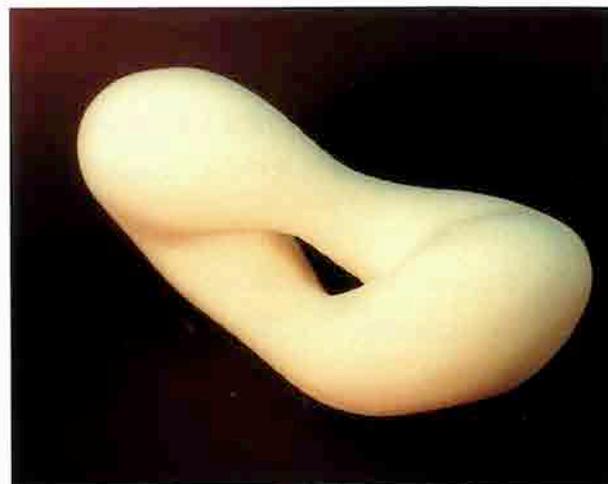
5 - 膨らんだ



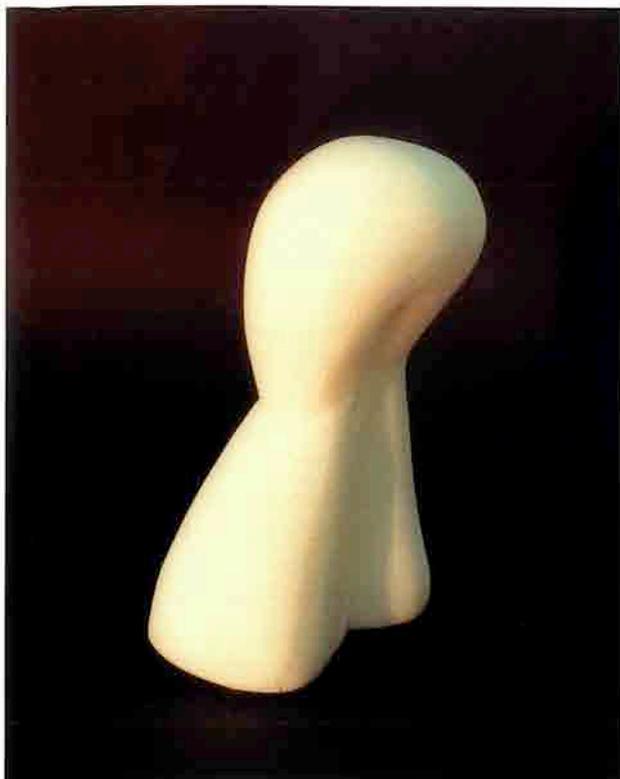
8 - 垂れた



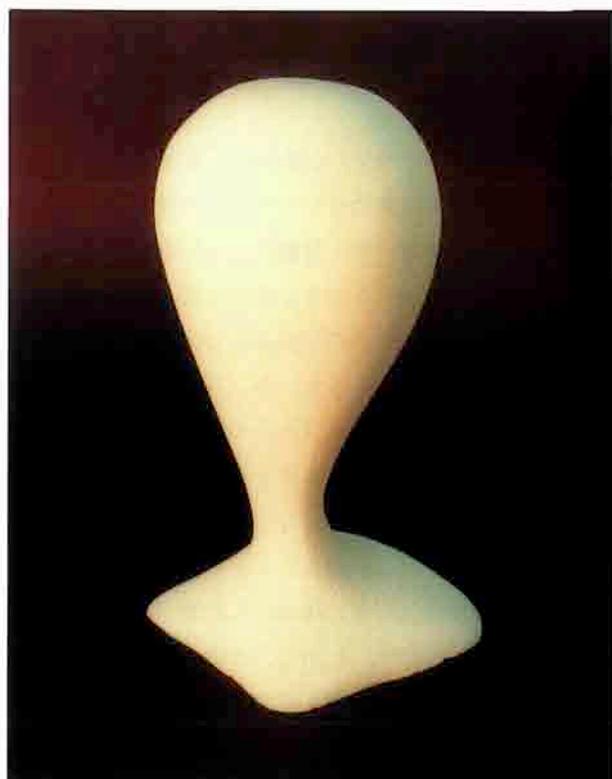
6 - 温もり



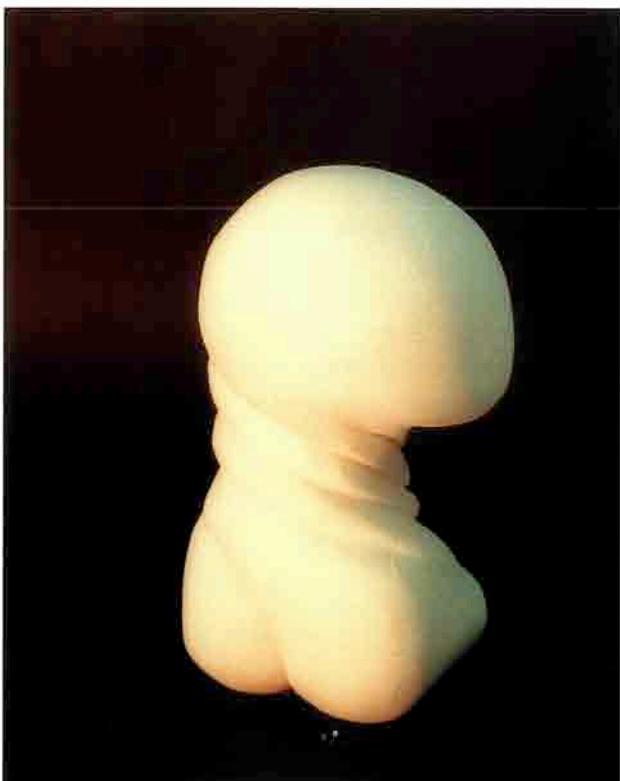
9 - 流れた



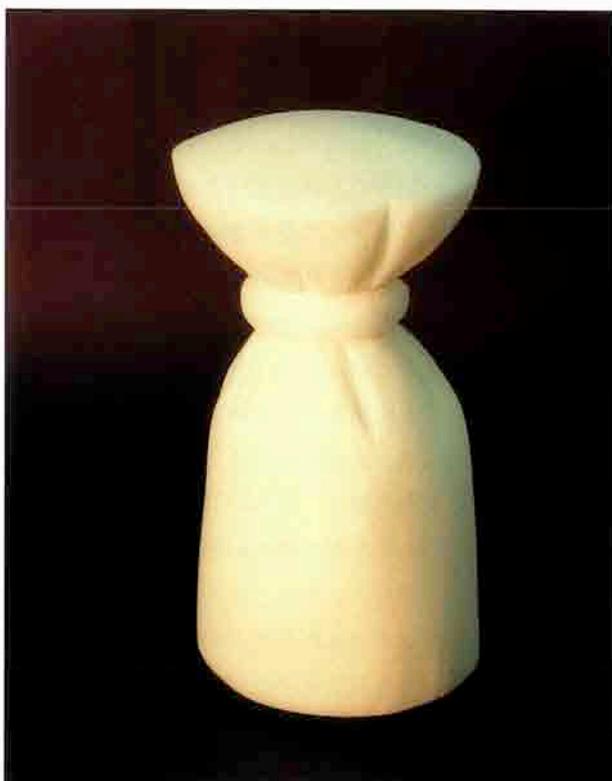
10-曲がった



12-溶けた



11-ねじれた



13-押さえ付けた

6. おわりに

講座終了後、ザイファート教授は、学生達の談話の中で最後に、日本の伝統的なシンプルで明快な美しさや繊細なモノの例（障子、畳、桂離宮、…）を上げて、それらをしっかりと、学ぶべきですと学生に言って結ばれました。我々も、また、日本の伝統美について再認識をしてきちんと学ぶ必要があります。尚、今回の演習は、本学のデザイン科工業デザインコースの基礎実習カリキュラムでも学習されています。本学とでは、指導方法などでも格別の相違点はありませんでしたが、発想法の導入法で若干の異なりが感じられました。それは発想の視点を本学では、基本幾何形態の構成から形態デザインに展開される場合が多いです。しかし、自由な発想法を求める場合には意味論からの展開方法でも有効であると思われました。つまり、形態デザインでの感性と言う、定量化や定質化で評価されにくい対象であるからこそ、人々、を説得させる為の理論力が、必要条件のようです。

人々は第三の文明と云われる人工的に形成された環境に住み続ける限り、これらのモノと慣れ親しんで個人的環境でも快適な日々を暮らしたいと切望しています。

生活環境で人がモノを使用し、その事を有益にして行くのは秩序正しい調和のとれたトータルなデザイン性であると思われます。モノには全て意味があるとすれば製品デザインには何が表現されているのかが製品を見た人の目に理解し易いと同時に、使い易い事で使用者に安心感を伝える事にも成るからです。デザイナーはデザインしたモノを通して人に語りかけているのです。言葉も人と人が話す為の道具と云われるのは、人の意志が伝達されるからです。言葉の特に、形容詞「柔らかい」、形容動詞、副詞などによって人間の感性がきめ細かく伝達されると思われます。また、このことは人間の感性がいかに複雑で深いかを認識させられます。デザインとは、人間が人間らしく生存する限りモノ造りに求められ、また、社会環境の中で人間とモノとが相互に依存し合って共生し続けて行くと確信されます。この度の講座でのザイファート教授の理論と実践には工業デザインコースのスタ

ップも学生共々、有意義な成果がありました。これを機会に今後、双方の交流が発展して行く事を祈ります。

索引

- (注1) 金沢美術工芸大学の産業美術学科では、本学の後に集中講義として三日間の日程でザイファート教授による授業がありました。その時の授業概要を同大の服部光彦助教授から戴く事が出来たので、その一部もまとめて付記しました。
- (注2) 本学デザイン学科では、これ迄に何度も外国から客員教授を招待した公開講座が開催されましたが工業デザインコースでは初回です。
- (注3) アメリカでは、ニューヨークの近代美術館でエドガー・カウフマン Jr.が中心となりデザインの啓蒙活動をし、その思想はグッド・デザインの指標となっています。現在も、館内では、世界中から選定されたグッド製品が展示されていて、これが永久コレクションと云われています。
- (注4) 18世紀末、イギリスで始まった産業革命による産業の工業化は、近代産業社会を発展させた反面、多くの社会問題を起しました。手工にとって変わった機械生産は、安価けれども悪趣味な粗悪品を大量に生産し、大量消費されました。これらの大量浸透によって起こった環境や生活の変化は、人々に違和感を与えて生活の「質」を見直す機会と成り、これによってデザインを成立させる発端に成ったのでした。ドイツでは建築家・ヘルマン・ムテージウス（1861～1927）が結成の端緒と成って、1907年にDWB（ドイツ工作連盟）が結成され、「良質」な工業製品を旨としたDWBのデザイン理念は、バウハウス、そしてウルム造形大学へのデザインの系譜があります。

参考文献

- (1) ジョン・ヘスケット、訳、栄久庵 祥二、「インダストリアル・デザインの歴史」、晶文社
- (2) 安部 公正 監修、美術手帳、1994年 Vol. No. 686、「世界デザイン史」、美術出版社
- (3) 福井 晃一 編、「デザイン小辞典」、(株)ダヴィッド社
- (4) 大槻 文彦 著、「大言海」、富山房
- (5) 大阪デザインセンター、「情報」-12 1974年
- (6) Michael Erlhoff (Ed.), 「Designed in Germany」, Prestel.